

・ 総括研究年度終了報告

薬剤師が担うチーム医療と地域医療の調査とアウトカムの評価研究

研究代表者 安原 真人 東京医科歯科大学医学部附属病院 教授・薬剤部長

研究要旨

本研究では、多数の病院薬剤師及び薬局薬剤師を会員とする学術団体である日本医療薬学会を活動の母体として、初年度に2つの調査研究班を立ち上げ、病院におけるチーム医療の推進や、薬局におけるかかりつけ薬局機能をもった在宅医療提供薬局を推進するための調査研究を行った。

A.研究目的

超少子高齢化社会における医療提供体制の再構築が求められる中で、チーム医療と地域医療を推進する上で薬剤師が担うべき役割を明らかにする。

B.研究方法

日本医療薬学会を中心として日本病院薬剤師会ならびに日本薬剤師会との連携のもとに、医療機関におけるチーム医療の先進的事例を収集し、調査・解析した。かかりつけ薬局機能をもった在宅医療提供薬局を推進するための新たな基準を作成し、有識者へのヒアリングとアンケート調査を行った。

C.研究結果

1. チーム医療推進分担研究班(分担研究者:佐々木均):平成22年4月30日付の厚生労働省医政局長通知「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について」において、薬剤師の医療チームでの積極的な活用が提言された。これまでも、病院薬剤師が医師の負担軽減や高度なチーム医療に貢献する様々な業務が実践され、日本病院薬剤師会や日本薬剤師会によるチーム医療や地域医療の先進事例が紹介されている。しかし、紹介された先進事例の多くは、学術的見地から解析・評価されているとは言い難い。そこで、医政局長通知において現行法で可能とされている業務の推進を図るため、それらの業務における薬剤師の更なる活用や、医師の業務軽減に対する貢献を評価し、効率的な医療資源の投入と活用に関する調査、研究を実施することとした。さらに、薬学教育6年制を踏まえて薬剤師に今後期待される業務範囲・役割の拡大について、現行法で可能な範囲と、それらを実施するために必要な条件等について調査・検討を行い、その効果、影響等を評価し、薬剤師の担うべき役割を明らかにすることを目標に定めた。

初年度となる平成25年度においては、患者への安全・安心の医療を提供する業務および医師の負担を軽減し、安全で高度な医療提供を目指した薬剤師の先進事例を調査・収集した。先進的チーム医療として、抗がん剤治療におけるチーム医療、緩和ケアにおけるチーム医療、精神疾患治療におけるチーム医療、TDMが必要な薬物治療に対するチーム医療、

救急・ICU 領域におけるチーム医療などを対象とした。薬剤師が担うチーム医療の代表例として、医師と薬剤師の合意に基づく処方提案と電子カルテ機能（神戸市立医療センター中央市民病院）経口分子標的薬の薬剤師外来（日立製作所日立総合病院）救命救急センターICU（集中治療室）におけるチーム医療（昭和大学病院）地域医療情報ネットワークを活用する薬局・薬剤師（長崎県薬剤師会）を選び、2月16日に開催するシンポジウムにおいてその活動を具体的に報告し、チーム医療における薬剤師の役割について総合的に考察した。

2. 在宅医療・かかりつけ薬局推進分担研究班（分担研究者：吉山友二）：薬局薬剤師は、地域医療の担い手として、地域完結型の医療・介護の体制を整備するため、地域包括ケアシステムの一員として在宅医療における明確な役割を示し主体的に取り組むことが重要となる。現在、76.5%にあたる多くの保険薬局が、在宅訪問薬剤管理指導の届け出を出しているものの、実績は、1カ月あたり患者1～20人という薬局が56.6%を占め、薬局が在宅医療に関わる機会が未だ少ない現状にある。本分担研究班では、薬局業務運営ガイドラインや、在宅療養推進アクションプラン、その他、厚生労働省や日本薬剤師会などから出されている通知等と、これまでに実施されてきた調査研究報告結果を踏まえて、かかりつけ薬局機能をもった在宅医療提供薬局を推進するための新たな基準を作成した。基準の策定に際しては、基本的な考え方および理念を明確にした上で、具体的な検討項目である医薬品等の供給体制、多職種との連携体制の整備、地域保健医療への貢献、安全管理体制の整備、災害時等の体制整備、医薬品情報の収集、プライバシー・守秘義務・個人情報保護、薬局機能情報等の提供、各種調査・研究等への協力、薬学生実務実習等の受入などについて多面的に協議・検討し、「薬局の求められる機能とあるべき姿」としてまとめた。作成した新たな基準案に関して、日本薬剤師会等の協力で、全国の薬剤師会会長等の役職者を抽出し、有識者へのヒアリング調査を行った。さらに、本案を日本医療薬学会ホームページに掲載しパブリックコメントを求めた。寄せられた意見に基づき修正した版を日本医療薬学会理事会に諮り、確定版（<http://www.jsphcs.jp/cont/14/0107-1.html>）を平成26年1月に公表した。本分担研究班は「薬局の求められる機能とあるべき姿」のとりまとめとアンケート調査による妥当性評価をもって、単年度の調査研究を完了した。

D.健康危険情報

なし。

E.研究発表

なし。

F.知的財産権の出願・登録状況

なし。

.分担研究年度終了報告書

1. チーム医療推進分担研究班

分担研究者 佐々木 均 長崎大学病院 教授・薬剤部長

A. 研究目的

平成22年4月30日付の厚生労働省医政局長通知以来、全国でチーム医療が推進されてきた。チーム医療とは「多種多様な医療スタッフが、各々の高い専門性を前提とし、目的と情報を共有し、業務を分担するとともに、互いに連携・補完し合い、患者の状況に的確に対応した医療を提供するもの」（医政局長通知、前文）と位置づけられ、それぞれの医療スタッフの十分なコミュニケーションを前提とする活動が必要である。日本病院薬剤師会によるチーム医療や地域医療の先進事例が紹介されているが、学術的見地から解析・評価されているとは言い難い。そこで日本医療薬学会を通じ、病院におけるチーム医療の先進的事例を収集するとともに、薬学教育6年制を踏まえた薬剤師が求められている業務について必要な調査研究を行う。期待されている業務について、それらに関係医療職種と協力・連携しつつ実施し、その効果、影響等を評価する。

B. 研究方法

本研究は、日本医療薬学会の中にチーム医療の調査研究班を組織し、研究班を主体として平成25年度より平成27年度までの3年間に亘り実施する。平成25年度については、薬剤師の医療機関におけるチーム医療の先進的事例の収集を行い、患者への安全・安心の医療を提供する業務および医師の負担を軽減し、安全で高度な医療提供を目指した先進事例の調査を行う。先進的チーム医療として、抗がん剤治療におけるチーム医療、緩和ケアにおけるチーム医療、精神疾患治療におけるチーム医療、TDMが必要な薬物治療に対するチーム医療、救急・ICU領域におけるチーム医療などを対象とする。また、医師の負担軽減、患者への安心・安全な医療提供に結び付くチーム医療の事例なども解析する。さらに、薬学教育6年制を踏まえて薬剤師に期待されている役割について、必要な情報の収集を行い、それらを実施するための計画を検討する。平成26年度については、25年度の調査結果を踏まえて、先進的事例を収集し、医療現場での貢献度について解析を実施する。また、薬学教育6年制を踏まえて期待されている業務についても、それを実施するための計画を設定し、試行的に実施を検討する。平成27年度については、先進的事例と貢献度の収集・解析を継続し、それらを取りまとめ、薬剤師の行う業務の効果、メリット、デメリット等もまとめて、報告書にとりまとめる。また、薬学教育6年制を踏まえて期待されている業務については、それらに関係職種と協力・連携しつつ、具体的な計画の下それらを実施し、その効果、影響等を評価する。

C．研究結果

- 1) 長崎あじさいネットの視察 (4-9 ページに記載)
- 2) 「薬剤師が担うチーム医療と地域医療の調査とアウトカムの評価研究」シンポジウム (10-??ページに記載)
- 3) 神戸市立医療センター中央市民病院の視察 (??-??ページに記載)

D．健康危険情報

特に記載すべきことなし。

E．研究発表

特に記載すべきことなし。

F．知的財産権の出願・登録状況

特に記載すべきことなし。

1) 長崎あじさいネットの視察

研究協力者 土屋 文人 日本病院薬剤師会 副会長・日本薬剤師会 副会長

日時：平成 25 年 12 月 12 日 (木) 9:00~15:00

「あじさいネット」の視察、研究打合せスケジュール

薬局におけるあじさいネットの視察及び研究打合せ

日時：平成 25 年 12 月 12 日 (木) 9:00~10:30

場所：宮崎薬局バス通り店 (長崎市平和町 1 1 - 1 3)

あじさいネットに関する視察

日時：平成 25 年 12 月 12 日 (木) 11:00~13:00

場所：長崎大学病院医療情報部

佐々木均(分担研究者:長崎大学医学部教授)との打合せ

日時：平成 25 年 12 月 12 日 (木) 14:00~15:30

場所：長崎大学病院 薬剤部 部長室

薬局におけるあじさいネットの視察及び研究打合せ

長崎県における「あじさいネット」を活用した処方鑑査、患者指導の実際の状況について、長崎県薬剤師会会長 宮崎長一郎先生（研究協力者）へのインタビューおよび薬局における「あじさいネット」の活用状況について、視察を行った。「あじさいネット」は、参加している病院の検査値、画像診断ほか、カルテ情報を患者さんの同意の元で診療所や薬局で確認することが可能となる医療情報ネットワークであることについて説明があった。保険薬局では患者さんの状態や診察内容を確認し、患者指導や疑義照会に利用している状況について説明を受けた。

「あじさいネット」は、患者情報を詳細にみることができると、患者の状態を把握した上で薬剤管理指導を可能とする有用なツールであることを確認した。電子お薬手帳を全国で普及させようとしているが、あじさいネットはその次の段階のシステムであると考えられた。

あじさいネットに関する視察

長崎大学病院医療情報部 松本武浩 准教授より「あじさいネット」について説明が行われた。「あじさいネット」は NPO 法人 長崎地域医療連携ネットワークシステム協議会が運営する地域医療情報ネットワークである。「あじさいネット」には、長崎県の基幹病院 22 病院が情報提供病院として参加しており、また、情報閲覧施設として、診療所・薬局を中心とした 216 医療機関が参加している。「あじさいネット」が構築する地域医療ネットワークシステムでは、医療機関同士で診療情報の相互参照が可能となっている。また、患者さんは自宅近くの「かかりつけ医」（情報閲覧施設）から基幹病院（情報提供病院）での検査結果などを確認できる等、各医療機関および患者が、このネットワークシステムを通じて最大限のメリットと利益を得られるよう配慮してある。また、セキュリティに関しては『VPN 技術』を導入することにより、低コスト且つ、専用線と同等のセキュリティが実現されている。

「かかりつけ医」より紹介され、基幹病院でどのような治療を受けてきたのか、カルテ情報をおかかりつけ医が確認することにより、シームレスな医療を患者さんへ提供することが可能となっている。また、薬局では、基幹病院での治療内容および入院期間中の治療効果、副作用を確認することができ、安全・安心な医療の提供に大きく寄与しているとの説明を受けた。

佐々木均(分担研究者:長崎大学医学部教授)との打合せ

宮崎長崎県薬剤師会会長と一緒に長崎大学病院薬剤部を訪問し、佐々木均 教授を交え、これからのチーム医療についての研究の進め方について、検討を行った。「あじさいネット」は、お薬手帳の電子化よりも、数段進んだ医療情報ネットワークが構築されていることが確認できたこと、今後、このような医療情報ネットワークを広げていくことが重要である

ことが合意された。長崎の「あじさいネット」は、構築に大きな補助金が入っておらず、受益者が負担する独自の資金で成り立っている。このため、資金は限られているものの継続的な運営が可能になっている。他の地域でも補助金などで医療情報ネットワークを構築しようとする試みがなされているが、補助金の終了とともにネットワークも終了することが多く、継続性を考慮したシステムの構築が重要であることが話しあわれた。

本研究の今後の方針として、分担研究者の北里大学薬学部 吉山友二先生が実施している「在宅医療・かかりつけ薬局推進」に関する調査結果の公表することが話合われた。また、チーム医療に関するシンポジウムを開催し、先進的チーム医療を紹介し、関係者間の討議を通して、共通認識醸成が重要であることが提言された。先進的チーム医療のモデルとしては、日本病院薬剤師会でも調査しているため、協力してシンポジストを選定することとなった。

先進的チーム医療に関しては、今年度を含め 3 年間で報告書の作成ができるように、分担研究者および研究協力者で、会議を開き進め方について検討することとなった。